

# 中村敦夫

## ひとり語り

元・原発技師のモノローグ

### 朗読劇

# 線量計が鳴る

原発事故ですべてを奪われた老人。その真摯な独白が、不毛の荒野にかすかな光をもたらす。いったい、だれが責任をとるのか。

2018年 6月17日 (日)

## デザインプラザHOFU

防府市八王子二丁目8番9号 (ゆめタウン防府前) TEL 0835-25-3700

**開場** 13時半 **公演** 14時～16時

**全席自由 一般：前売り2000円 (当日2500円)**  
**中高大：1000円 小学生無料・託児なし**

主催：中村敦夫朗読劇実行委員会 (代表・那須正幹)

後援：防府市文化振興財団 / FM わっしょい / ほうふ日報 / 防日新聞社

協賛：NPO 法人さわやか / 自由律句壇クラブ / 日本熊森協会 / 西京シネクラブ / なちゅら

チケット取り扱い場所：防府市、山口市、周南市各主要プレイガイド

問い合わせ：090-6413-5835 (防府・清木)

090-9466-0899 (山口・大久保)

090-4802-4787 (周南・山田)

# 挑戦

# 中村敦夫

福島原発事故以来、私は表現者として何を描くべきか迷い続けてきました。

社会哲学としても政治哲学としても、私はエコロジーを中心思想にあげてきましたので原発問題は最重要テーマのひとつでした。

しかし、実際に事故が起きてしまうと、更なる知識と理解の必要性を痛感しました。何度か福島を訪ねたり、チェルノブイリを視察したり、資料を読み込んだりしているうちに、どんどん時間が過ぎてしまいました。



そこで、これまで私が直面した課題の中から、最重要と思われる部分を選び出し、「劇」の形で人々に伝えようと決意しました。

私が青春時代を過ごした新劇界は、社会問題と正面から取り組み、オピニオンリーダーの役割を果たしていました。特に私が所属していた劇団俳優座は、ベルトルト・ブレヒト（ドイツの劇作家）の提案する新しい演劇理論の実践に挑んでいました。

従来の演劇は、社会を人間関係や個人の問題として捉え、観客の情念や感情を揺さぶる技術をドラマツルギーとしてきました。これに対し新しい演劇は「啓蒙演劇」と呼ばれ、社会の不条理や不幸をもたらす構造を分析し、発見の驚きや、理解の喜びを与えようとするものでした。私がこれから上演する「線量計が鳴る」は、この種の演劇の延長線上にある「情報演劇」とも言うべき実験作品のつもりです。



中村敦夫（なかむらあつお）

一九四〇年東京生まれ。小・中学校時代をいわきで過ごす。磐城高校に入学したが、半年後に都立新宿高校に転校。東京外国語大学を中退して俳優の道へ進み、一九七二年放映の「木枯し紋次郎」が空前のブームに。ニュースキャスターや参議院議員なども務め作家としても活動している。主な著書に「チェンマイの首」、同志社大学講義録「簡素なる国」など。

